

令和6年度学校評価報告書

学校名（廿日市市立大野東小学校）

評価計画					自己評価					学校運営協議会 委員評価コメント	改善方策
中期経営目標 (めざす児童生徒像)	短期経営目標 (めざす児童生徒像)	目標達成のための方策	評価項目・指標	目標	中間 8月	最終 2月	達成	評価	結果と課題の分析		
① 確かな学力 【伝え合う力】 考えをもち 伝え合う子 【小中共通項目】	◎相手の考えを正確に理解したり、自分の考えを適切に表現したりできる児童	①既習内容の定着に向け適用題を授業に確実に位置づける。 基礎的な事項（国語科は語彙、算数科は四則計算など）の復習を授業や学習に位置づけ定着を図る。 ②相手意識・目的意識をもたせた伝え合う場の設定	・学力調査における全国平均との比較 ・学期末テストのクラス平均80%以上 ・児童アンケート 「自分の考えを相手に分かりやすく伝えようとしている。」肯定的評価 ・児童アンケート 「友達の考えを聞いて、『なるほど』と思ったり、新しいことに気付いたりしている。」肯定的評価	+2.0 80% 75% 80%	国+2.3 算-0.4 国 92.8% 算 64.3% 85.7%	国-0.68 算-0.43 国89.3% 算64.3%	0% 0% 112% 80% 121% 115%	D D A B A A	・方策の取り組みに各学年で差があった。 ・国語科、算数科ともに目標の全国平均+2.0には届かず、全国平均も下回った。国・算ともに記述問題と課題がある。特に、国語科は書くこと、算数科は記述および、低学年は基礎である四則計算に課題あり、高学年は定義など意味理解に課題がある。 ・単元テストの結果は、国語科は研究部を中心に全校で様々な取組を行った成果が出ている。算数科に関しては目標値を大きく下回っており、課題が大きい。 ・研究授業・協議を進めていく中で、授業のねらいを達成するために、児童が何をするように伝え合っているか、そのための発問をどのようにしていくかという具体的な手立てを教職員間で話し合うことを通して、より伝え合いの内容が焦点化され内容の質が上がった。話し手の意識だけでなく、相手の考えを理解し、自分に生かしていくための聞き方についても高めていく必要がある。	・算数の平均点が低すぎる。学ぶことは生きていくのに必要な力である。大切に身に付けさせてほしい。 ・中学校での数学の結果も低かった。小学校で低ければ、中学校でも結果は出ないのでは。 ・この度の授業参観で、早く課題の終わった一部の児童が何もすることなく手持ち無沙汰にしている姿を目にした。この「隙間時間」をどう過ごさせるかの対策も、学方向上につながるのではないかと。	・国語科は言葉の精緻や使い方に關するもの、書くことに関する領域に課題が見られるため、振り返りの記述や日記などを条件指定をしながら書かせる。 ・算数科において、各学年でその学年の重要項目に関して残りの期間復習をして確実に定着させる。 ・伝え合いレベルをより具体化した交流の型を、どの授業でも意識させることで、内容の質を高めていく。
② 豊かな心 【敬愛心の心】 自他を大切に する子	◎居場所感のある学校生活をめざして、自分のよさを生かしたり友達のよさを認めたりしながら主体的に行動する児童	①児童の関わり合いを増やし、お互いのよさを認め合う活動を充実させる。 (帰りの会や行事等での児童相互の肯定的評価など) ②思いを伝えることができる場、受け止めてもらえる場の設定と工夫。(日記、学級活動、個別面談など)	・アセスアンケートにおける「友人サポート」の偏差値50以上の児童の割合 ・児童アンケート 「安心して学校に来ることができている」肯定的評価の割合	70% 85%	70.5% 89.9%	71.5% 88.6%	102% 104%	A A	・友人サポートの結果は学年で差が大きく、一番高い学年が78%、低い学年が63%だった。「安心して学校に登校できている」の質問に否定的に答えている児童は、4・5年生が多かった。 ・各学年、よさを認め合う活動をしているが、児童や内容が固定化してしまうという意見が多かった。 ・日々の授業の中で思いを伝え合う活動を取り入れたり、日記やアンケートなど、教師に対して個別に自分の思いを伝える場を設定したりすることで、自分の思いをしっかりと伝えることができた。	・縦割り班活動で、学年を超えた関わりが育っている。 ・4・5年生の「友人サポート」の低さと50m走の達成率の低さについて何か関係はあるのか疑問に思った。コロナの影響があるのか、他校の実態と比較し、対策が行えるかよいと思った。 ・親子での対話が少ないことが課題だと感じる。これは学習場面の「聞く力」にも影響しているのでは。	・自然に見つけたよさを発表するだけでなく、友達のよさを意識して見つけようとするのが大切だと考える。そのため、感謝という視点で見付けたり、期間限定のイベントを仕組んだりするなどの工夫をする。 ・縦割り班活動では、掃除だけではなく遊びの機会を取り入れることで、児童の関わりを増やすことにつながった。時間を長くしたり、回数を増やしたりしていきたい。
③ 健やかな体 【体力を高める力】 健康を守り体力を高める子	健康を守る生活習慣を身に付け、自らの体力を高める児童	①準備運動などフォーム作りの工夫（基礎体力を高める運動の継続実施） ②外遊びへの意欲を高める工夫（委員会との連携等）	・新体力テスト「50m走」の項目でB評価以上を達成した児童の割合（年3回計測）	50%	57.75% (男62%) (女53.5)	46% (男52%) (女40%)	92%	B	・男子は1、2、3、6年生が、女子は1年生が目標を達成した。特に、低学年の達成率が高かった。しかし、全体的に女子の達成率が低い傾向があった。また、4、5年生の達成率が低かった。 ・各学年で準備運動の仕方によらつきがあったため、1時間の運動量の差が大きくなった。 ・「体を動かすことが楽しく」と感じている児童は低学年に多い傾向があり、50m走の達成率も同じく高い。そのため、楽しく体を動かす機会を増やしていく必要がある。	・運動会の姿からも個人差が大きいと感じた。外で遊ぶ習慣がない児童が増えている。授業や生活の中で自発的に体を動かしていくような楽しい取り組みを進めてほしい。 ・4・5年生の50m走の達成率の低さと「友人サポート」の低さについて何か関係はあるのか疑問に思った。コロナの影響があるのか、他校の実態と比較し、対策が行えるかよいと思った。 ・目標値が低いように感じる。	・どの単元でも走力に繋がる運動ができるように、職員に活動例を発信していき、誰でも準備運動を工夫することができるように情報を共有していく。 ・体を動かす体験会を開く機会を増やし、多くの学年に向けて実施していく。また、学年の発達段階に合わせた活動を実施していく。 ・「べこひがり体操」を休憩時間に放送で流し、体を動かす機会を増やす。
④ 働き方改革	健康でやりがいをもって勤務できる環境	放課後業務時間の確保（繁忙期の縮短、会議時間の工夫、産業医の健康講話、助言を活かした環境づくり等）	・心身の健康の保持増進の意識が高まった職員の割合（アンケート） ・時間外勤務時間月平均45時間を超える教職員の割合	75% 30%	86.8% 34%	75.5% 30%	100% 100%	A A	・掲示板に産業医さんのアドバイス等を全教職員に周知し、自分の健康や病気の予防への関心を維持できるよう情報を見える化したことで、約37名の教職員は意識できるようになっている。 ・10月から暮会の回数を4回から1～2回に減らすことで、30分間以上のゆとりのある時間となり、学級・学年・分掌の仕事の時間に活用できるなど、退行時間の減少へつながっている。	・教職員「心のストレスチェック」のアンケート分析では、心理的な仕事の負担（量・質）に対してストレスを感じていることが分かった。よって、来年度は、教職員の仕事の質や量に対する実態調査を行い、課題解決していく。 ・退校時刻を意識して、生活できているが、時間外勤務時間月平均45時間を超える教職員が同じなので仕事量について検討し、一部に偏らないようにするように、分掌担当の仕事を改善する。	